Āp ŚS XVI. 3. 4-6 覚え書¹⁾

井 狩 弥 介

I. 黒ヤジュル・ヴェーダ派の TS 所属のシュラウタ・スートラ中, Baudh ŚS が TS 中の vidhi 要素に最も密接な関係にあり, これら両者の密接さは MS と Mān ŚS, 或いは, 白ヤジュル・ヴェーダ派の ŚB と KŚS との関係に類比することが出来る。ところで, TS 所属のスートラ中で, この Baudh ŚS に時代的に遅れて, これと対立して一群をなす, いわゆる新 Taittirīya 派の諸スートラ, 即ち, Bhār ŚS, Āp ŚS, また Hir ŚS は, さらに時代の下る Vaikh ŚS と共に, 自派の聖典, 即ち, TS の規定に従う一方, これと並列的に, 若くは, これを逸脱して他派の規定をその祭式記述中に取り入れて, いわば折衷的な立場を示す。本稿では, Āp ŚS の一規定を取り上げ, このスートラが他派規定を撰取したために起る混乱の一例を検討し, 更にその背後にある問題, 即ち, YV 所属のスートラが典拠とする YV 諸 Saṃhitā, Brāhmaṇa の vidhi 部分における伝承の相違に関して一仮説を提示したい。

II. Āp ŚS XVI. 3. 4-6:

“purīṣyo 'si viśvabhara” (TS IV. 1. 3. f) iti mṛtkhanam abhimantrya, “tvām agne puṣkarād adhi” (ibid. g-n) ti kṛṣṇājine puṣkaraparṇe ca saṃbharati catasṛbhis tisṛbhir vā gāyatrībhir brāhmaṇasya, triṣṭugbhī rājanyasya, jagatībhir vaiśyasya. (4) yaṃ kāmayeta 'vasīyān syād' ity ubhayībhis tasya saṃbharet. (5) aṣṭābhiḥ saṃbharati. (6)

本部分は, Agnicayana 祭中の予備祭式である Ukhāsaṃbharana 中の一場面で, Ukhā なる土器作製のための粘土を, 祭式手続きをもつて掘り出し, 傍らに置いた黒カモシカの毛皮の上に集める箇所である。この Āp ŚS の規定を, まず, このスートラの帰属する Taittirīya 派の聖典たる TS の以下の vidhi 要素と比較してみよう。

TS V. 1. 4. 5:

a) catasṛbhiḥ sam bharaṭi..... gāyatrībhir brāhmaṇasya..... triṣṭugbhī rājanyasya b) yaṃ kāmayeta 'vasīyānt syād' ity ubhayībhis tasya sam bharet..... aṣṭābhiḥ sam bharaṭi.....

Āpastamba は, sūtra 5 と 6 とに於いて, 概ね TS に従っている。しかし, sūtra 4 の下線部分は TS に触れられていないところである。この点を TS vidhi 部分の b) を採用している Baudh ŚS の記述²⁾ と比較すれば事はより明白となる。Āp の sūtra 5 と 6 とは Baudh に対応するものと考えられる。従つて, Āp の TS よりの逸脱は sūtra 4 中の次の三点に求められる。1) 第一マントラ「*purīṣyo 'śi viśvabharā.....*」の適用の仕方。2) 陶土を集める際に用いるマントラの数の規定中の第二選択肢「*tiṣṭbhir vā* (或いは三マントラを用いて)」の部分。3) 祭主の身分を列挙する際の, 「*Vaiśya* 祭主のためには *Jagatī* 韻律のマントラを用いて」の部分。第一点の *abhimantraṇa* は, 現存 YV 文献の *brāhmaṇa* 部分にも, 時代的に Āp に先行するスートラの何れにも対応規定はみられない。むしろ, Āp ŚS の *Pravargya* 祭規定の対応箇所³⁾ からの影響を認めたい⁴⁾。一方, 他の二つの逸脱部分は, 実は, *Maitrāyaṇīya* 派, 即ち MS ないしは, これに忠実に従う *Mān ŚS* からの影響とみられる。

MS III. 1. 5: 6. 10-17:

a) *gāyatribhir brāhmaṇasya sambharati..... triṣṭubhā rājanyasya..... jagatibhir vaiśyasya.....* b) *yaṃ kāmayeta 'rdhnuyād' iti tasya gāyatribhīś ca triṣṭubhīś ca sambhared.....* c) *tiṣṭbhiḥ sambharati..... yajus turīyam.....*

Mān ŚS VI. 1. 1. 26-27:

tasmin (scil. puṣkaraparṇe) "purīṣyo 'śi viśvabharā" iti yajuśā purīṣam āvapaty rg-bhīś tiṣṭbhiś ca; "tvām agne puṣkarād adhi, tam u tvā dadhyaññ ṛṣiś, tam u tvā pāthyo vṛṣe" ti gāyatribhir brāhmaṇasyottarābhīś triṣṭubhī rājanyasyottamābhir vaiśyasya. (26)

yaṃ kāmayeta 'rdhnuyād' iti tasya gāyatribhīś ca triṣṭubhīś ca sambhared; gāyatriābhyādāya triṣṭubhā nivapati. (27)

MS は, a) で祭主がバラモン, クシャトリヤの場合に加え, 祭主がヴァイシュヤの場合に用いるべきマントラの韻律名を記す。c) によれば, 韻律マントラの数は三で, これに一つの *yajus* を付加するとされる。Mān ŚS によれば, この *yajus* は, “*purīṣyo 'śi viśvabharā.....*” なる冒頭のマントラを指し, 以下 MS のマントラ・テキストでこれに後続する各三つづつの計九個の韻律マントラが指定される。Mān ŚS は, これら後続のマントラ中の最初の三つを *pratika* 引用法で指定し, 以下のマントラを, MS マントラ・テキスト中で後続する *Triṣṭubh* マントラ群, 最後の *Jagatī* マントラ群とるように同定している。以上の如く Āpa-

stamba の当該箇所には上の Maitrāyaṇīya 派の影響が認められる⁵⁾。

しかしながら、Āp の Sūtrakara がこのように他派の規定を撰取した結果、実際の祭式実行には困難が生ずる場合が起る。Maitrāyaṇīya 派 (若くは Kaṭha 派) に倣つて、Vaiśya が祭主となつた場合を考慮すると、この際に彼のために用いられるべきマントラの同定が殆んど不可能となつてしまうからである。というのは、祭主のステータスに対応し、各四、若くは、各三の異なるマントラを用いる場合、総計十二、又は九のマントラが必要となる道理であるが、Āp がここに典拠として用いる TS のマントラ部分には、当該部分での使用を予定されるマントラ数は、最初の yajus を含めても八個しか存しないからである。以下に各 YV Saṃhitā が祭式の本部分に適用すべく挙げているマントラを検討し、その数とそれぞれの韻律を記した表である⁶⁾。

- i) Yajus ii)-iv) Gāyatrī v)-vi) Triṣṭubh vii) Bṛhatī viii) Triṣṭubh
ix)-x) Jagatī xi) Anuṣṭubh

各 Saṃhitā に記載されるマントラ数は、VS が i)-vii), TS, KS が i)-viii), MS が ii)-xi) である。VS のマントラ数が最小であり、TS, KS はこれより一マントラ多く、MS では、以上に存しない更に多くのマントラを記載している。そこで、TS では、もし Āp の規定するようにマントラの数を祭主がブローフmana、クシャトリヤ、ヴァイシュヤの各場合に各々四とした場合、ヴァイシュヤ祭主に対し適用すべきマントラは残らぬこととなり、一方、その数を各三とした際も、ヴァイシュヤの場合に適用すべきマントラは一つしか残らぬこととなる⁷⁾。Āp ŚS, また同じくヴァイシュヤ祭主に対し Jagatī 韻律マントラの使用を規定する Hir ŚS への註釈者は、様々手段でこの困難を回避しようとする。しかし、Āp の Sūtrakāra の規定の一般的手法より判断する限り、これらの解決法はまず認めえないところである⁸⁾。Āpastamba の Sūtrakāra は、自派の典拠、TS の vidhi 部分の規定に従いつつも、一方、他派の規定をも選択肢として採用し、折衷を計つたのであるが、この際、彼は、自派の聖典、即ち、TS の当該部分のマントラ・テキストに載せられているマントラ数が、実は、規定の折衷をはかった Maitrāyaṇīya 派の聖典 MS の対応部分のマントラ数と一致しないことに気付かなかつた、或いは、この不一致を無視したために規定の実際に不備を生じたこととなる。

ところで、以上に指摘した Āp ŚS の不備は、筆者の知る範囲では、このテキストの例外的事態に属する。Āp は、先述の如く、YV 帰属の各 śākhā の規定

に対し、折衷的態度を取るが、概ね、実際の祭式実行には無理を生じない。他派の規定、或いは自派の聖典にないマントラを採用する場合には、必ずその他派マントラを完全な形で引用し、自派の典拠との混乱を生じない。では、以上の例外的不備はどうして生じたのであろうか。この理由は、恐らく、ここで祭主のステータスが関説されている所に求められるかと思われる。一般に祭主となり得る資格は四ヴァルナの上位三者にある。TS の vidhi 部分は、上位二者の場合に関説するがヴァイシュヤには触れない。一方、MS と K-KapS ではヴァイシュヤ祭主の場合をも含めて遺漏なしとみえる。これが恐らく、Āp の Sūtrakāra が自派の典拠たる TS を越えて他派の規定を採用したゆえんと考えられる。

ただ、ここで YV 各派の Saṃhitā, Brāhmaṇa の vidhi 部分とこれに対応するマントラ部分を併せて検討してみると、奇妙な事実が注意される。一つは、KS の vidhi 部分が、ヴァイシュヤ祭主の場合に Jagatī 韻律のマントラの適用を明言するにも拘わらず、KS の当該マントラ部分には Jagatī 韻律のマントラは唯の一つも載せられていないことである。他の一つは、各 vidhi 部分が、祭主のステータスに応じて各々、Gāyatrī 韻律、Triṣṭubh 韻律、Jagatī 韻律 (MS, K-Kaps のみ) のマントラの適用を明言するが、一方、対応するマントラ・テキストのマントラの韻律はこの記述と正確な一致を示さぬという事実である⁹⁾。

この様に、vidhi 部分、これに做う Śrautasūtra にみえる、祭主のステータスによる韻律マントラの使い分けと、マントラ・テキストの強引な整序付けの試みには明らかに無理が感じられる。この強引な枠付けには、その背後にあつたろう韻律に関する或る固定した思考枠組の持ちこみが行われたのではないかと疑わせる。実は、これと全く同種の問題が、同じ Agnicayana 祭式の別の二つの儀軌部分に存在する¹⁰⁾。これらの箇所での韻律マントラの扱いを検討すると一つの推測が生じてくる。即ち、以上の場合すべてにおいて、本来は祭主の身分に対応するマントラの使い分けは存しなかつたのではないかということである。少なくともマントラ部分成立時点には存しなかつた、祭主身分による韻律マントラの使い分けは、恐らく他の祭式での例——たとえば、祭火設置祭 Agniādheya の brahmaudana など——に做つて導入されたのであろう。この際、当然、brāhmaṇa での祭式思弁の展開の結果、強く意識されるに至つた、韻律名をめぐる象徴思考が背後にあつたに違いない¹²⁾。この韻律に関する象徴思考の、本部分の祭式コンテキストへの採用・導入の契機となつたのは、マントラ部分での Gāyatrī 韻律と Triṣṭubh 韻律の並列存在であつたと思われる。即ち、前者を、その象徴たるバ

ラモン階級に、後者をクシャトリヤ階級に対応させ、そしてこの思考の延長上、ヴァイシュヤの場合を導入し、マントラ・テキストに本来存しなかった Jagatī 韻律のマントラをもちこもうとしたということになる。只今の例の場合にみられた、いささか強引なまでの韻律名によるマントラの一括化——本来、それとは異なるつた韻律マントラを含んでいるに拘わらず——は、恐らく、韻律をめぐる brāhmaṇa 的象徴思考のパターンによる強引な画一式説明付けが、この儀軌の vidhi 部分成立に於いて働いたのだと考えられる。とりわけ、MS における、他の Saṃhitā にみられない二つの Jagatī 韻律マントラの付加は、この点を裏書きするものであろう。

- 1) 本稿で扱う部分の YV 祭式文献での対応箇所は次の通り。略号は、印仏研 23 巻第 2 号の拙稿に用いたものに倣う。

Baudh ŚS X. 3: 3.11-X. 4: 3.15 (XXII. 1: 117.16-18), Āp ŚS XVI. 3.4-6, Hir ŚS XI. 1.29-31, Vai ŚS XVIII. 1: 250.18-251.5, Mān ŚS VI. 1.1.26-27, Vār ŚS II. 1.1.21-23, K ŚS XVI. 3.1, TS IV. 1.3. f-n, V. 1.4.5, MS II. 7.3: 77.3-78.4, III. 1.5: 6.10-17, KS XVI. 3: 223.7-21, XIX. 12: 15.4-5, KapS XXX. 2: 161.10-16, VS XI. 32-37, ŚB VI. 6.1.6; 14.

- 2) Baudh ŚS X. 3: 3.11-X. 4: 3.15: apoddhṛtya puṣkarapaṇṇam aṣṭābhir mṛdaṃ harati “puriṣyo ‘si vjśvabharā” iti. tāsām catasro gāyatriyāś catasras triṣṭubhaḥ. sa (*sci.* adhvaryuḥ) piṇḍaṃ piṇḍaṃ vaiva rcā haraty; api vāṣṭābhir ekam eva piṇḍaṃ harati.

- 3) cf. Āp ŚS XV. 1.10: uttareṇa mṛtkhanaṃ kṛṣṇājinaṃ prācinagrīvam uttaraloma āstīrya, “devī dyāvāpṛthivi” iti mṛtkhanaṃ abhimantrayate. “ṛdhyāsam adye” ti mṛtkhane ‘bhriyā prāhṛtya “makhasya śira” ity upādāya, “makhasya tve” ti harati. “makhasya tvā śīrṣṇa” iti kṛṣṇājine nivapati.

- 4) Pravargya 祭の冒頭部 Pravargyasambharaṇa と Ukhāsambharaṇa の関係については、印仏研 23 巻第 2 号の拙稿 (pp. 1057-1046) を参照。

- 5) 一方、四マントラを用い、かつ Vaiśya が祭主たる場合の規定は、以下の Kaṭha 派の規定にその淵源をたどることができる。KS XIX. 4: 4.18-23: a) catasṛbhis saṃvapati..... gāyatrībhir brāhmaṇasya saṃvaped..... triṣṭubhī rājanyasya..... jagatībhir vaiśyasya..... b) yathāchandasam evobhayībhis saṃvaped yaṃ kāmāyeta ‘vasiyān syād’ iti..... aṣṭābhis saṃvapati..... cf. KapS XXX. 2: 161.10-16.

但し、K-Kaps の vidhi 部分での明言にも拘わらず、対応する KS マントラ・テキスト部分には、Jagatī 韻律のマントラが無いこと（後述）、また、マントラ数に關しても、KS は、Jagatī 韻律マントラの使用を述べない TS と同一であり、この点、K-KapS の当該 vidhi 部分自体に MS よりの影響があるのではないかの疑問が持たれる。

- 6) MS. KS. TS. VS (KapS は、本マントラ部分の写本を欠く) は、本部分に關し、

マントラ数を異にするが、共通部分は僅少のヴァリエントを除き、殆んど同一である。また、それらヴァリエント自体、韻律決定に影響を及ぼしはしない。

- 7) 一方、この規定を攝取された側の Maitrāyaṇīya 派に於いては、困難は起らない。即ち、バラモン祭主に対しては Gāyatrī 韻律のマントラ ii)-iv) を、クシャトリヤに対しては、v)-vii) を、ヴァイシュヤに対しては、他の Saṃhitā の持たないマントラを含めて viii)-x) をと、各三個づつのマントラが、祭主の資格ある上位の三ヴァルナに対してそれぞれ適用可能だからである。
- 8) Māhādevaśāstri ad Hir ŚS XI. 1.30:..... catasṛbhir upadeśaḥ. ṛṭṭiyām “tam u tvā pāthya (TS IV. 1. 3. i)” iti dvir āvartayati. tathā saptamī (ibid. n)..... jagatībhir vaiśyasya; “janasya gopā” iti tisṛbhiḥ (TS IV. 4. 4. g-i), “asāvi soma (TS I. 4. 39. a)” iti caturthī.

また、Caland によれば、Tālavṛndanivāsin の Āp ŚS への註釈(未出版)も、ヴァイシュヤ祭主の場合に上と同じく TS IV. 4. 4. g-i を用いるという。Das Śrautasūtra des Āpastamba. Bd. III, Amsterdam 1928, p. 10 しかし、Āpastamba の Sūtrākāra は、用うべきマントラを、Taittirīya 派の聖典の場合には基本的に pratika 引用法で、他派から借用する場合は必ず sakalapāṭha 引用法でその sūtra 中に明示するのが通例であり、上掲諸註釈者の解釈には従い難い。

- 9) 一例を Mān ŚS にとつてみると、ii)-iv) は、Gāyatrī 韻律であるが、Triṣṭubh であるべき v)-vii) のうち、vii) は Bṛhatī であり、また Jagatī たるべき viii)-x) のうち、viii) は Triṣṭubh である。祭主のステータスによる韻律マントラの使い分けを述べる何れのテキストについてみても、対応するマントラ・テキストは、韻律に関し、vidhi 部分、或いは、Śrautasūtra の規定要求と正確に一致しない。この例外は、祭主のステータスによるマントラの使い分けを述べない白 YV 派のテキストのみである。ŚB VI. 4.2.1-6: a) atha mṛtṣpīṇḍam abhimṛśati “purīṣyo ’si.....” iti..... b) athainaṃ (*scil.* mṛtṣpīṇḍam) parigrhṇāti; abhriyā ca dakṣiṇato hastena ca hastenaivottaratas “tvām agne puṣkarād adhi.....” iti gāyatrībhiḥ..... athaite triṣṭubhā uttare bhavataḥ..... athaiśā bṛhaty uttamā bhavati..... KŚS XVI. 3.1: pāṇibhyām parigrhṇāty enaṃ dakṣiṇottarābhyām dakṣiṇaḥ sābhris “tvām agna” iti ṣaḍbhiḥ sarvaṃ sakṛd dhṛtvā puṣkaraparṇe nidadhāti.
- 10) その一つは、Prayāṇa 儀軌における samidh-adhāna の部分: TS V. 2.2.4, MS III. 2.2: 17.8-10, KS XIX. 12: 15. 4-5, Kap S XXXII. 2: 173.1-3, ŚB VI. 8.1.6; 14. 他の一つは、Sikatā-vyūhana の箇所: TS V. 2.6.4, MS III. 2.5: 22.12-13, KS XX. 4: 22.16, Kap S XXXII. 6: 178.11-12, ŚB VII. 3.2.45-46.
- 11) cf. A. Weber, Indische Studien 8, 1863, p. 8f. なお、印仏研第23巻第2号の拙稿 p. 1049 f.